交錯する世界 焦点の地

文人の武蔵野

黒井千次と小谷忠典 ③

黒井千次さん（1932年～）は、個々人や集団に流れるそれぞれの時間が持つ意味を追求する初期の代表作「時間」から出発し、複数の時間が切り結ぶところに立ち上がる土地を描いた連作「群棲」の完成に至ります。その過程で「武蔵野短篇集」の副題がついた連作「たまらん坂」も生まれます。

小説「たまらん坂」に収録された7編の舞台は、国立、国分寺、小金井、多磨霊園、東大和、日野などで、沿線で言うと中央線を軸に、西武多摩川線、西武拝島線、京王線が走る一帯です。「群棲」の舞台は特定されていませんが、都市近郊です。「群棲」の世界を空間的に広げたところに「たまらん坂」がありますので、どちらも武蔵野の文学と呼ぶことが可能です。

主人公のひな子にとって、谷保は特別な場所だった（映画「たまらん坂」から）

小谷忠典監督（77年～）は、狭窄にある絵本作家佐野洋子の自宅に通い、佐野の人生と読者の人生を「100万回生きたねこ」の作品世界に交錯させて「ドキュメンタリー映画 100万回生きたねこ」（2012年）を撮りました。「フリーダ・カーロの遺品 石内都、織るように」（15年）では、メキシコの画家フリーダの遺品とそれを撮る写真家石内都を追いました。

映画「たまらん坂」では、ふたつのものが交錯する世界が差し出されます。上りと下りが交錯する線路と坂道、高層ビルと林道、ペットボトルの水と蛍が生息する川の水、バイオリン曲と子守唄。黙読と音読、作者と読者。事実と想像。過去の記憶と進行中の現在。ひらがな表記と漢字表記――。それらはやがて谷保（やぼ・やほ）という場所で焦点を結びます。この映画では、谷保が武蔵野です。それは、主人公ひな子のふるさとして幻視される「たまらん坂」成立以前の原風景でした。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

おすすめの1冊

「100万回生きたねこ」（佐野洋子）

小谷忠典監督の「ドキュメンタリー映画 100万回生きたねこ」は、佐野洋子の絵本「100万回生きたねこ」の受容を立体的に示し、いのちについて問いかけます。顔を出さないことを条件に出演した佐野を監督がどのように撮ったのか。興味のある方は、絵本とともにDVDをご覧ください。

（講談社）

武蔵野

武蔵野支局 〒180-0006
武蔵野市中町1の13の1 3F
電話 0422(51)3131
FAX 0422(51)3133
musasino@yomiuri.com
都内版編集室
電話03(3217)1465・1466
江東支局 電話03(3631)6116
立川支局 電話042(523)4477
ホームページ
www.yomiuri.co.jp/local/

購読は 0120-4343-81

【広告】読売Palette 03(6272)9027
【折込チラシ】 0120-03-4343
【読売旅行】 03(5550)0666

12月16日（木曜日）
旧 11月13日〈大安〉

■ あすの暦

通日 350
月齢11.8
（正午）

＝東京標準＝

日出	6.44	満潮	3.53
日入	16.29		14.55
月出	14.31	干潮	9.09
月入	3.48		21.42
			（中潮）